〔特別講義要旨〕

臼歯用化学重合型コンポジットレジンの10年後の臨床成績について

広島大学歯学部　歯科保存学第一講座
新谷　英章

と　き：1991年5月16日（木）
ところ：本　学

コンポジットレジンを臼歯に適用する上でその長期安定性や耐久性，歯髄為害性などを総合的に検索する必要性がある。当教室では，2種類の化学重合型コンポジットレジン（クラレ社製Clearfil Posterior，3M社製P-30）を用いて臼歯部を修復した症例を長期にわたり観察してきた。これらの症例が10年を経過したので，その成績を，4年後，7年後の成績とともに，分析・検討し，臨床的な評価を行った。修復術式は齲蝕検知液とラウンドバーを併用し，カーバイトバーで形成したnon-bevelの窩洞にトータルエッチング法を用いて修復し，ホワイトポイントで即日研磨を行った。修復歯種は第一，第二大臼歯が多く，窩洞形態別には1級複雑窩洞が多く，4年後のリコールでは，約100例ずつの症例が診査されたが，10年後では，その約半数となった。なお，本症例の修復には，窩洞の深い場合には，各種セメントでspot liningを施した。診査は，臨床的諸症状についての問診と触診，視診により，辺縁適合性，辺縁部変色，摩耗，表面あらさ，修復物の着色・変色，二次齲蝕，歯髄反応の7項目をUSPHSの評価基準に従い行った。その結果，辺縁適合性では，10年後に評価bの症例が両材料とも30%存在したが，修復物の脱落，破折といった再修復を要するような症例は認められず，辺縁部変色，摩耗，表面あらさも，良好に推移していた。しかし，両材料とも修復物表面の変・着色傾向が認められた。10年の症例観察より，修復後7年まで良好に経過した症例は，ほぼ健全に経過し，臼歯咬合面の齲蝕において，caries detectorに染色された象牙質のみを除去し，エナメル質および象牙質にエッチングを施した後，ボンディング剤を塗布しコンポジットレジン修復を行った本症例は，歯髄反応や再修復を要することなく良好に経過しており，臼歯部へのコンポジットレジン修復は適当であると考える。